

かい ぼう がく

魯迅に解剖学を指導し、 日中友好の象徴に。

藤野巖九郎(1874年～1945年)は、
坂井郡下番村(現在のあわら市)で、
代々医者^{しもばん}を営む家に生まれました。
福井尋常中学校や愛知医学校で学
び、同校の教員を経て、仙台医学専
門学校に移りました。教授に昇進し
た1904(明治37)年、留学生として入
学した魯迅(周樹人^{しゅうじゅじん})に解剖学などを
指導しました。



当時は日清・日露戦争の影響を受け、中国人を軽視する風潮がありました。
藤野は魯迅に対して講義ノート^{こうぎ}を添削^{てんさく}するなど、とても丁寧^{けいし}に指導しました。そ
こには、藤野の中国医学の発展という思いも込められていました。後に魯迅は、
文学を志して仙台医学専門学校を退学し、帰国しますが、藤野先生への尊敬
の念は生涯失われることはありませんでした。

魯迅の小説『藤野先生』は、中国の中学校の教科書に今も掲載されており、
藤野巖九郎という名前は中国の人々に広く知られています。



左:『藤野先生解剖学教室』
右:『藤野先生研究室』(東北大学史料館より)

魯迅と藤野を書いた『惜別』^{せき べつ}

藤野厳九郎は、帰国する魯迅との別れの際、自分の写真の裏に「惜別」と記したものを渡しています。この二人のエピソードを踏まえ、太宰治が小説にした『惜別』を紹介します。魯迅が藤野厳九郎にノート添削をしてもらい感激するシーンです。（「周さん」が魯迅です。）

周さんは、さらにくわしく説明して、藤野先生が、あの最初の解剖学の発達に就いて講義をなされて、それから一週間ほど経って、たしか土曜日だった、先生の助手が周さんを呼びに来たので、研究室へ行ってみると、先生はれいの人骨のむれに取りかこまれ、にこにこ笑いながら、「君は、私の講義が筆記できますか？」と尋ねる。

「ええ、どうにか出来るつもりです。」

「どうだかな？ ノートを持って来て見せなさい。」

周さんがノートを持って行くと、先生はそれを預って、二、三日経ってから、かえして下さって、そうして、

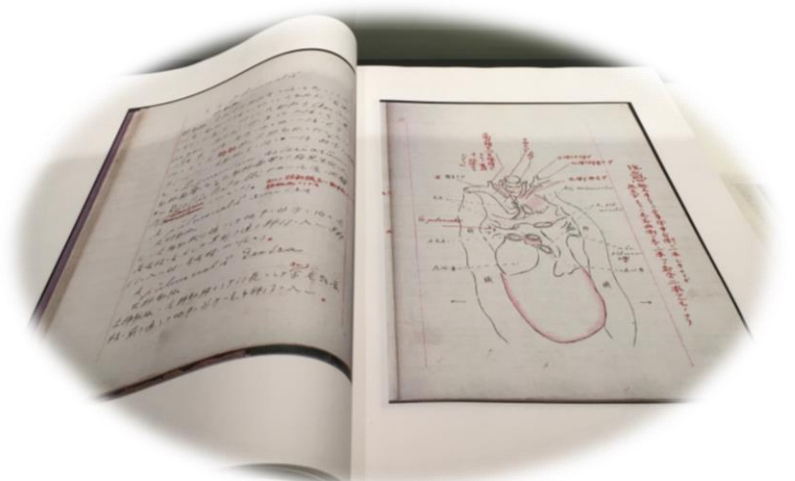
「これから、一週間毎にノートを持っておいで。」とおっしゃる。

周さんは先生から返されたノートをあけてみて、びっくりした。ノートは始めから終わりまで全部、朱筆が加えられ、たくさんの書落しの箇所が綺麗に埋められているばかりか、文法の誤りまで、いちいちこまかく訂正せられているではないか。

（太宰治『惜別』より）

ぜひ、魯迅の作品にも

親しんでみましょう。



脈管学ノート(複製) (当館展示)
魯迅の講義ノートに藤野が朱書き添削をしています。